

文化学園 服飾博物館

だより

Vol.
19

2006.4.1

新収資料の紹介

ドレス：ケミス アフガニスタン 20世紀

ギルザイ・パシュトゥン族の女性のドレス。ハイウエストのワンピース型で広く長い袖が特徴。主に胸パネルと袖口にビーズを使った刺繡が施され、集団ごとにデザインが異なる。スカート部分は絹地に金糸で文様を織り出している。



イヴニング・ドレス 1905年頃 ウォルト作 フランス
マーガレット・ダリィ・ブラウン着用

プリンセス・ラインのシルエットが美しい、ターメリック・イエローのイヴニング・ドレス。胸周り、袖口のレース、両肩にわずかに施されたラインストーンとシンプルな装飾ながら、カット・ベルベット地に表された花束とリボンの大柄な模様を効果的に用い、華やかなドレスに仕立てている。オートクチュールの創始者であるウォルトの2代目の作品。着用者のマーガレット・ダリィ・ブラウン(1870-1911)はアメリカ・モンタナにおいて鉄鋼王と呼ばれた富豪、ダリィ家に生まれた女性である。



単 衣 明治時代 明治天皇の皇后（昭憲皇后）着用

明治天皇の皇后（昭憲皇后）^{ひとえ}着用の単衣。生地は鶴と波の文様が織り出された見事な紋絹である。上前の裾から肩に向かって桐の木を表し、裾には萩と白い花をつけた低木、蔓に戯れる3匹の子犬を配している。このように植物を中心として、一つのまとまった風景を表す文様構成は御所の着物の特色である。文様にはすべて刺繡が施され、植物は燃りをかけない平糸でゆつたりと繡われ、子犬は緻密で写実的に表現されている。



夾纈裂（部分） 17~19世紀初め チベット伝来

^{きょうけいり}夾纈とは大まかに言えば、白く染め残したい模様を凸に膨った版木で布をきつく挟み、版木に開けた穴から染料を注ぎ各色を染め分ける技法である。日本には正倉院にその遺物が多数見られるが、その後絶えてしまった技法である。本資料は恐らく中国で作られたものがチベットに伝わったもので、版木に布を挟む際の折り返しの筋と布の織耳が残っており、染織技法を知るための貴重な資料である。

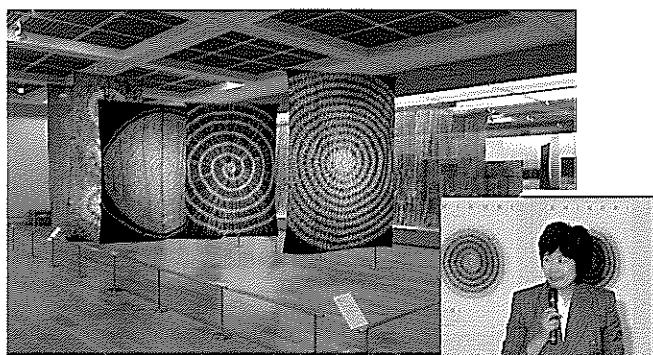
「ドレスのかたち 立体↔平面 1770－1960」
4月20日～6月7日

本学の図書館やリソースセンター、文化出版局、文化女子大学や文化服装学院の教員など、多方面からの協力を得て、立体のドレスを平面に展開したときの形や大きさ、平面の布地を立体にするためのパターンについて紹介しました。文化学園ならではのこの展示は、服飾関係者以外の方からもさまざまな視点で観ることができたと好評でした。会期中「オートクチュールのカッティング」と題し小杉早苗・文化ファッションビジネススクール校長による講演会を開催しました。



「世界の絞り」 6月29日～10月6日

日本の絞りをはじめ、東南アジア、インド、アフリカ、アンデスなど世界各地、約20か国の絞りを紹介しました。絞り染の基本は世界各地で共通でも、絹や木綿、ウールといった絞りが施される素材の違い、絞りの細かさの差によっても実に多彩な表情を見せます。「世界には、こんなにいろいろな種類の絞りがあるのに驚いた」「改めて日本の絞り染の多様さと技術の高さに感動した」などの感想が寄せられました。関連の催しとして、沼尻七子・文化女子大学助教授を講師に迎え、絞りの技法を中心としたレクチャーも行いました。



上から：
小杉早苗・文化ファッションビジネススクール校長の講演
「ドレスのかたち」展より 1860年代のドレスとパターン
「世界の絞り」展より 西アフリカの絞り
沼尻七子・文化女子大学助教授の講演

「館蔵名品展 日本服飾の美」 10月26日～12月10日

本展は、文化女子大学で開催された IFFTI (国際ファッショング工科大学連盟) の大会に伴い、来校された外国の方々をはじめとする参加者に、日本の服飾をご覧いただくために企画しました。展示の構成は、〈宮廷装束〉、〈小袖〉、〈武家服飾〉、〈能装束〉とし、公家装束の伝統を受け継いだ近代の宮廷装束、江戸後期の町方の小袖の最高峰に位置する三井家の小袖、彦根藩主・井伊家旧蔵の能装束など当館の主要な所蔵品を中心に80点余りを出品しました。日本人の美意識が反映され、また、さまざまな染織技術が駆使されたそれぞれの服飾を通じて、日本の高度な服飾文化にふれていただくことができました。



「一枚の布 一まとう・つつむ一」

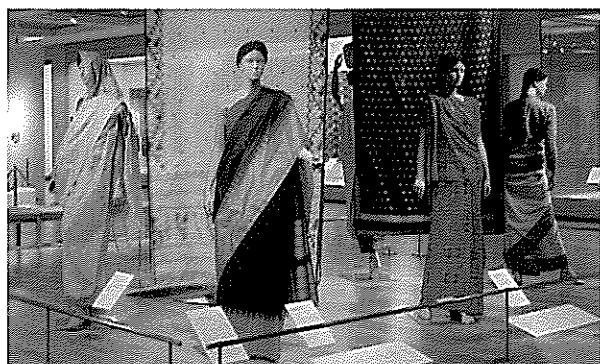
'06年1月12日～3月14日

一枚の布を「まとう」「つつむ」の用途に分け、アジアやアフリカなど26か国の巻衣や包み布を紹介しました。「まとう」では、布を巻き付けて衣服となる巻衣を、着装方法を示したイラストとともに展示しました。布の大きさや巻き方はそれぞれの地域で異なり、巻き方によって多彩な表情をみせる一枚の布に、感嘆の声が寄せられました。染織的な美しさだけでなく、着装方法に焦点をあてたこの展示は、服飾博物館ならではの企画といえるでしょう。

「つつむ」では、日本の風呂敷をはじめ各地域の包み布を紹介しました。



「日本服飾の美」展より 大正天皇着用の御祭服(手前)、女子の袴束(左奥)



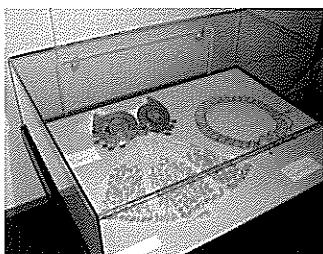
「一枚の布」展より インドのサリー

当館所蔵資料の集成、叢書「世界の服飾・染織」刊行。初刊は『三井家のきもの』

1979年の開館以来、日本はもとより諸外国の服飾・染織資料を広範囲にわたり収集し、年間4回の展示で公開してきました。しかし展示室の広さには限りがあり、必ずしも所蔵資料の全容を展観することができませんでした。そこで所蔵資料の総合図録の役割を果たすと同時に、世界の服飾・染織文化を概観できるように、主要資料を系統立てて記録する叢書の刊行を計画。資料は日本、ヨーロッパ、アジアなどに分類、さらに時代、地域などによってまとめ、文化学園内はもとより外部の研究者にも執筆を依頼して広い観点から研究を進めます。当館を代表するコレクション『三井家のきもの』は108ページ、A4変型判。2000円で2006年4月刊。以後『西アジア・中央アジアの民族服飾』、『ヨーロッパの戦後(1945年以降)ファッション』(仮題)などを順次刊行。装丁、レイアウトは、当館のポスターをデザインする松本章・文化女子大学教授です。当館でお求めいただけます。



『三井家のきもの』



トルコの銀製のベルトと金糸の刺繍を施した帯

● 「シルクロードをめぐる美の物語 I 西アジアの装飾と衣装」展に協力

9月1日から13日にかけて、ミキモトホール(ミキモト本店・銀座)にて開催された「シルクロードをめぐる美の物語 I 西アジアの装飾と衣装」に服飾博物館の所蔵品から37点の衣装と装身具を出品しました。この展覧会はミキモトが2005年から3年間シルクロードをテーマにしたジュエリーコレクションを展開することに合せて企画されたもので、文化出版局『ミセス』と共に協力しています。



● 「クルマとモード～ベル・エポックからモダニズムへ」展に協力

10月6日から12月11日まで開催された、トヨタ博物館(愛知県長久手町)での企画展「クルマとモード～ベル・エポックからモダニズムへ」に、ヨーロッパのドレス、服飾品など25点を貸出しました。この展示は、自動車が誕生した19世紀末から20世紀中頃までの欧米での車と人の関係を、ファッション、文献、映像などとともに概観したもので、文献では文化女子大学図書館の貴重書も紹介されました。



19世紀後期の自動車
と当時のドレス



モ里斯工房のテキスタイル

● 「装飾芸術の魅力 彩飾写本とアール・ヌーヴォーを中心に」展に協力

10月22日から12月18日まで、古川美術館(名古屋市)の特別展「装飾芸術の魅力 彩飾写本とアール・ヌーヴォーを中心に」に、モ里斯工房のテキスタイル2点を貸出しました。展示では、古川美術館が所蔵する15世紀作の『ブシロー派の画家の時祷書』に代表される彩飾写本の装飾文様と近代デザインの関わりが紹介されました。



● 朝日小学生新聞に連載

朝日新聞の姉妹紙である朝日小学生新聞では、子供たちにさまざまな分野のことについて知識を深めてもらう企画「朝小ミニ図鑑」を連載しています。このシリーズで、「日本の衣服編」10回(05年11-12月)、「世界の民族衣装編」12回(06年2-3月)にわたり、服飾博物館の資料を紹介し、当館学芸員が解説をしました。近年、総合学習や修学旅行などの機会に、服飾について知りたいという小中学生の入館者が増えています。日本の着物にもいろいろな種類があることや、世界の民族衣装から人々の暮らしを知る良い機会となつたことでしょう。



朝日小学生新聞の掲載紙面
「日本の民族衣装編」より

● 収集へのご協力に感謝申し上げます ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

博物館には寄贈のお申し出が多く寄せられております。昨年度の寄贈者および寄贈品を紹介させていただきます。

中村純子(能装束裂など)	城所綾子(角巻)	萬ちゑ(熊谷好博子の着物)
小川元(振袖、半襟など)	杉本とみ(着物、帯など)	吉澤顕(ブルガリアの民族衣装)
井上俊子(裂織帯など)	岩立広子(インドの民族衣装)	白岡美津子(昭憲皇太后的着物など)

* 順不同 敬称は略させていただきました。

06年度 展示のご案内

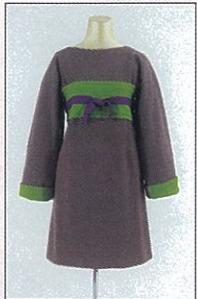
4月20日～6月10日

【異国趣味 —ヨーロピアン・ファッショニによるエキゾチズム—】

人は異国に未知の世界への神秘性を感じて生活や文化に関心を持ち、憧れを抱くことがあります。異国への興味は形や模様、色など多様に展開され、時には流行を作り出します。ヨーロッパでは18世紀から20世紀にかけてジャポニズム、シノワズリー、オリエンタリズムに代表される異国趣味がみられました。展示ではこれらの要素がファッションにどのように影響したかを、装いやデザインなど様々な角度からとらえます。



南国風の花と豪華模様裂
1740年頃 フランスまたはイタリア



"Kabuki" ドレス
1965年 ガーンライヒ アメリカ

10月18日～12月20日

【おとこのおしゃれ】

ここ数年、日本でも身だしなみに気を配る男性の姿を多く目にするようになりました。男性向けファッション誌の相次ぐ発刊や、昨年夏のCOOL BIZがその現象を加速させています。本展では、日本の武士の衣装や公家の流れを継いだ近代の装束、庶民の服飾、ヨーロッパの18世紀中期から20世紀前半のファッション、アジア、アフリカの民族衣装を紹介し、地域性や時代、身分によって、それぞれに育まれた独特の美意識を探ります。



スーツ：アビ・アラ・フランセーズ
1780年代 フランス



陣羽織 江戸時代

6月29日～9月22日 (*夏期休館 8月14～19日)

【夏のきもの－江戸時代～昭和時代－】

高温多湿な日本の夏を快適に過ごすため、夏の着物にはさまざまな工夫がこらされてきました。通気性に富み、肌ざわりのよい生地が選ばれ、裏を付けずに仕立て、絹地を「单衣」、麻地を「帷子」、木綿地を「浴衣」と呼び慣わしています。地色は白や青系統の色が多く、文様も水辺の風景や、あえて、秋や冬の風物を用いるなど涼しさが演出されています。本展は江戸時代後期から昭和にかけての夏の着物を館蔵資料によって紹介します。



帷子 江戸時代末 和宮着用



单衣 大正時代末～昭和時代初め 三井家旧藏

‘07年1月17日～3月14日

【動物からの恵み－服飾のなかの動物素材－（仮題）】

衣服や服飾品には綿や麻などの植物素材から作られているものの他に、動物の皮革や牙、鳥の羽根、貝などの動物素材を用いているものがあります。動物素材は人工的に作り出すことのできない独特の質感や色合いを持ち、それらに畏怖や憧れを抱いた人間がさまざまに工夫し用いてきました。展示ではこれらの服飾に焦点をあて、各地域でどのような素材を取り入れ、どのように生かしてきたかを紹介します。



キツネの毛皮付きコート
1930年代 ヨーロッパまたはアメリカ



動物の歯を使った首飾り
20世紀初期 フィリピン イロンゴット族

* 上記の予定は都合により変更されることがあります。

* 各展示会期中、当館学芸員によるギャラリートークを行います。

* 金曜日の夜間開館日を設けています。(各展示会期中2回、19:00まで開館)

詳しい日程はお問い合わせいただくか、ホームページでご確認下さい。

利用案内

- 開館時間 10:00～16:30 (入館は閉館の30分前まで)
- 休館日 日曜日、祝日、展示替え期間
- 入館料 一般 500(400)円・大高生 300(200)円・小中生 200(100)円
*()内は20名以上の団体料金
- 交通 JR/京王線/小田急線 新宿駅(南口)より徒歩7分
都営地下鉄 新宿線/大江戸線 新宿駅(新都心出口6)より徒歩4分
(地下道出入口O-1に隣接)